「アルバイトしてるなんて全然知らなかった」
向こうのテーブルで彼女は他のお客さんの注文を取っているところだった。まだ慣れていないようで注文を取る手はぎこちない。
約束の時間より少し遅れてナオヤはやってきた。入口近くで呼びかけたウエイトレスを無視して真っ直ぐにこちらへ歩いてくる。
「こんにちは、ナオヤさん」
「遅いぞナオヤ」
「少々待たせたが、お前の今朝の寝坊した時間よりは短いぞ。久しぶりだな、アツロウ」
一言多い。そりゃあ素直に謝るなんて思ってないし、オレも別に謝ってほしいわけじゃないけどさ。
窓際へ寄ったオレの隣に座ったナオヤへ向かってミドリちゃんがやってくる。
「ご注文は何にしますか？」
ミドリちゃんはちょっと緊張した様子だった。そういえば彼女がナオヤに会うのは封鎖解除以来初めてのはずだ。だから彼女は《ＣＯＭＰを作った男》としてのナオヤしか知らなくて印象はあまり良くないのだろう。
自分も会ったことがある女の子だとは気づかなかったのか、ナオヤは淡々と注文を済ませてこちらを向いた。
「ククク……学校には間に合ったか？」
「ぎりぎりだけどね」
「ならばまあいいとしよう。次からはせめて朝食ぐらい食べていけ」
「しつこいなあ。それで、渡す物って何？」
ナオヤは持っていた袋を渡してきた。
「お前にではない。伯母さんに渡してくれ」
「何これ？」
片手で持てる程度の袋の中身はケースに収まった数枚のディスクだった。ケースとディスクにはそれぞれラベルが貼ってある。そのラベルにはオレの想像もしていなかったような言葉が書いてあった。
『夕夜０歳～三歳』
『夕夜四歳～保育園卒業』
こんな調子で何枚かに分けられたディスクはオレが小学校卒業ぐらいまであるようだった。
「何だよこれは」
「伯母さんに頼まれていたんだ。古いテープを焼いて見られるようにしてくれって」
古いテープと言われて思いだした。確かオレが小さい頃は父さんがよくビデオカメラを持ちだしてオレやナオヤを撮っていた。自分の成長記録なんてわざわざ見返し